



中村 哲

Dr. Tetsu NAKAMURA
% Mission Hospital Peshawar
Peshawar, N. W. F. P
PAKISTAN

お元気ですか。ペシヤワルには暑い夏が本格的にやってきました。家族をつれてきてからもう4ヶ月がすぎてしまいましたが、先づは気候や風土に慣れるのが一苦労です。

一週間ほど前からラマザン（断食月）が始まり、外で大っぴらに水ものめないのは大変です。日中は強烈な陽ざしでろくな仕事もできません。万事スローペースで少しづつ事を運ばねば体がまいてしまいます。

先日、北西辺境州のらいの大会があり、この州全体のハンセン病対策の方針が討議されました。しかし全体の印象として、派手な討論や業績の誇示のわりには、実質的に各診療所の機能は極めて悪く、大きな進歩はないように思われました。

州のらいセンターは丁度一年前に公営に移管され、当病院はいわば支所としてその機能を補う役目にあるといえます。しかし、実質は、依然として当病院が患者の間で信望があり、公営病院をしのぐ状態にあります。ここは自己宣伝の強い土地柄で、うのみに聞いているととんでもない誤解をひきおこします。

先日、ある診療所の監視に出かけた西独人の担当官がその仕事について注文をつけたところ、銃で脅かされてすごすごと帰ってくるという状態。うちの病院にしても、患者の入院理由たるや、時には仇討ちを逃れるための“社会問題”によることも希ではありません。話としては面白いのですが、現場になると、いやはや信じて貰えないような苦労もあります。

私の現在の仕事というのは、いわば便利屋のような役目で、病棟の炊事場の設計から、タイピスト、ドライバー、薬集めの稼業、スタッフの業務のふりわけ、靴と靴屋さがし、うらきず防止のための礼拝マット作り（回教徒はどんなことがあっても日に数度の礼拝を欠かさず、固い床の上で傷の治療が遅れるのです。）、等々で、何も派手な「診療活動」を展開しているわけではありません。

現在はあくまで下地作りです。ワークショップもフィールド・ワークも、結局は自力で何もかもおぜんだてをせねばなりません。外交辞礼に頼っていると大変なことになります。今は黙々とマイペースでわが道をゆくのみです。

ではまた。